様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５８６

研究課題名（和文）北海道北見市常呂町居住者の方言と郷里方言との相関に関する社会言語学的研究

研究課題名（英文）A sociolinguistic study on the relationship between Tokoro Dialect and Their Home Dialect

研究代表者
朝日　祥之（ASAHI, YOSHIYUKI）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・准教授

研究者番号：５０３９２５４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の結果，土佐方言・西美濃方言の特徴を維持させつつも北海道方言的特徴を習得していることが明らかとなった。岐阜地区の居住者の場合，アスペクトは西美濃方言の特徴が維持される傾向は強く，断定の助動詞の場合はその逆の傾向が強い。連母音の融合については維持と判断できるが，他の連母音については消失したと考えられる。土佐地区の居住者の場合，土佐方言の特徴が維持され，北海道方言的に特徴が習得されることはほとんどない。一方，北海道方言的特徴であるカ行・タ行子音の有声化，自発表現について。前者は使用が見られないことから，西美濃方言・土佐方言の維持と見なしてもよい。

研究成果の概要（英文）：The study showed that general tendency is that Tokoro dialect speakers acquired Hokkaido dialect features with a varying degree of use of Tosa and Gifu dialect. For Gifu residents, their aspectual expressions are likely to be maintained while the copula feature is lost. In the same way, some diphthongs are used and other are not. For Tosa residents, Tosa daielcts features are in many cases maintained, and the Hokkaido dialect are less likely to be adopted. Other features such as intervocalic voicing (/t/ and /k/) and the ergative expressions are not used among them.For these two features, their home dialect forms are adopted.

研究分野：社会言語学

キーワード：常呂町方言　方言接触　社会言語学　言語変化　北海道

１．研究開始当初の背景

本研究は，北海道北見市常呂町（以下，常呂町と称する）への移住による言語変容を扱う。本研究は移住先における言語使用だけではなく，郷里の言語使用にも着目する。つまり，移住が開始した時期から現在に至るまでの間に生じた常呂町の言語変容と
郷里で観察される言語変容と相関を明らかにすることに最大の特色がある。具体的には，郷里方言の特徴が常呂町でも継続して使われているのか，または他の方言的特徴に交替されたのかを，アクセント，アスペクト，コピュラ，推量「べ」，四つ仮名，原因・理由表現，連母音の融母音化，カ行・タ行子音の有声化等を例に考察する。

２．研究の目的

本研究は，北海道北見市常呂町岐阜地区と土佐地区居住者と彼らの郷里である岐阜県揖斐郡大野町と高知県中西郡佐川町居住者双方に関する文献，既存の音声資料，現地調査から，北海道常呂町方言と郷里方言の言語変容に見られる相関を明らかにすることが目的である。具体的には，（１）郷里方言に見られる特徴（アスペクト，アクセント，原因理由表現，連母音の融合化等）ならびに（２）北海道方言の特徴（推量の「べ」，カ行／タ行子音の有声化等）に着目し，郷里方言，東北方言的特徴をどの程度，維持・習得しているのかを明らかにする。北海道方言研究において，特定地域を構成する複数の地区とその郷里方言との相関を取り上げた研究は皆無に等しい。この点で，方言接触研究，社会言語学的研究への貢献が期待できる。

３．研究の方法

既存の音声資料ならびに関連文献等の収集，ならびに現地面接調査を企画・実施する。既存の音声資料はデジタル化を行い，面接調査はデジタル音声を整備する。いずれも書き起こしを行った上で統計分析を行う。面接調査では，常呂町岐阜地区，土佐地区，大野町，佐川町の居住者に対する面接調査を企画・実施する。面接調査では，各話者の言語生活が把握できることを目指した半構造化インタビューを行い，話者から自発音声を収集する。

４．研究成果

分析の結果を以下の項目について行う。

（１）　カ行・タ行子音の有声化

朝日（2014）でも触れたがこれに該当する例は岐阜県居住者には１例も確認されなかった。その一方で，土佐地区の居住者の中に，これに該当する例（例１）が認められた。

（例１）とってもかいてもらうことはわがらん

この特徴は，そもそも土佐方言にも岐阜県の西美濃方言にも認められない。おそらく，土佐地区居住者が一世であり，岐阜地区の対象者は二世であるので，北海道方言の特徴をどの程度北海道での生活で習得したかを把握する必要がある。岐阜地区の１世の録音に未だ着手していないため，今後の作業で検討することにしたい。

（２）　アスペクト

次にアスペクトを取り上げる。アスペクトは土佐方言・西美濃方言においていずれも進行態と結果態で「ヨル・トル」を使い分ける（久野 1994，杉原・山口 1994）。一方，西美濃方言では，久野（前掲），杉原・山口（前掲）に指摘されていることは，この区別が曖昧になっている，または，「トル」への統合である。朝日（2014）によると，「トル」の使用率が全体の 58.5%ともっとも高く，それに「テイル」（21.1%），「テオル」（17.9%）が続いていることがわかる。基本的には「トル」が優勢形式であると言える。また，出身方言に存在すると言われた「ヨル」は４例（うち２例は「コヨッタ」）確認された。「トル」が 72 例あることを踏まえれば，「トル」への統合が進んでいると判断できる。

なお，久野（前掲），前原・山口（前掲）で対象となった話者の年齢はそれぞれ 1927

年，1917 年である。西美濃方言においては「ヨル・トル」の使い分けは曖昧ながらも存在していたとのことである。その使い分けは岐阜地区においては，西美濃方言よりも早い段階で消失し，「トル」への統合につながったと考えられる。

この他に本発表で確認されたアスペクト形式のうち「ジョル」が２例（「アソンジョル」「キーチョレ」）確認できた。これらは土佐方言で確認できる形式である。ここで土佐地区居住者の使用したアスペクト形式であるが，例文（２）（３）に見るように，「ヨル」「トル」が使用されることがわかる。

（例２）あの東京から来たゆーて先生がきよった

（例３）手で持って探しとるんだわ

（３） 断定の助動詞

断定の助動詞についてである。土佐方言では断定の助動詞は「ジャ」が，西美濃方言において，断定の助動詞は「ヤ」がそれぞれ使われるが，常呂町では，どの形式が用いられるのであろうか。朝日（2014）では断定の助動詞については「ダ」の使用（90.3%）が優勢であることがわかる。「ヤ」の使用率は全体の 6%に過ぎない。基本的に北海道での生活でこれに該当する形式が「ヤ」から「タ」に交替したと考えられる。その一方で，土佐地区居住者の中では，「ジャ」が「ダ」と共に使用されていることが確認できた（例文４，５）。

（例４）卒業はこっちじゃったろ

（例５）３年じゃった

（４） 自発表現

北海道方言においては現在においても自発表現「サル」は使用されているものである。資料全体を見たところ，これに該当すると思われる例が岐阜地区居住者に１例（例６）確認できた。土佐地区の居住者には現段階では確認されていない。

（例６）（大きな木が）燃えていきサルでしょ

自発表現が他の項目（特に音声的特徴に関するもの）と比べれば，使用頻度の低いものの一つでため，１例のみの使用だからといって，当該形式が広く使われているのか，またはたまたまこれしかないようなものかを判断すべきではない。

ただし，使用が認められるということは，岐阜地区の話者の言語体系内に自発表現が組み込まれ，かつ使用形式として位置づけられているということである。その意味では，北海道での生活を通し，現地の文法的特徴を身につけたものと考えられる。

（５） 連母音の融合

最後に連母音の融合を見る。いわゆる/ai, oi, ui/等が融合する現象である。これは岐阜地区居住者に使用される可能性のあるものであるが，資料で確認できた融合は/ai, ae/であったため，これに絞って分析を試みた。全体的に用例数が多くないため，あくまでも参考程度の情報にしかならないかもしれないが，/ai/の場合に[ai]よりも[æ]となるケースが多くなる点は興味深い。また，/ae/についても[e:]となるケースが一番多く，[æ]となることもあるようである。類似した傾向は 2013 年調査のデータでも確認できる。この現象自体はやはり岐阜地区の話者が出身地の音声的特徴を維持しているものだと判断できよう。なお，土佐地区居住者にはこれに該当する例は見られなかった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

１．北海道方言の録音資料の資源化と課題ー北見市常呂町調査を事例にー，朝日祥之，北海道方言研究会会報，2018 年，98 号，査読無，32-38.

２．Interface between regional and social dialects in Hokkaido: The case of the small town of Tokoro, Yoshiyuki Asahi, Multilingual Perspectives in Geolinguistics,

2015 年，査読無, 62-68.

〔学会発表〕（計 2 件）
１．北海道北見市常呂町における言語変容, 朝日祥之，北海道方言研究会第 222 回研究例会，札幌市北区民センター, 2017 年.1 月

２. Little Gifu in Tokoro: Dialect contact, maintenance, and change in the Japanese small town in Hokkaido，Yoshiyuki Asahi, Sociolinguistics symposium 21 University of Murcia. 2016 年 6 月

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
朝日 祥之（ASAHI,Yoshiyuki）
国立国語研究所・言語変異研究領域・准教授
研究者番号：50392543